2月9日の説教要旨　　「痛みを背負う者」　　森嶋道牧師

ヨハネによる福音書14章1～14節

忘れもしない2008年の春。私は伊丹教会で伝道師2年目が始まろうとしていました。その頃、各地で花壇を荒らすイタズラが広がっていきました。私が見たのは駅前のカメラに映ったサラリーマンが、使い捨てのナイロン傘でチューリップの花をたたく映像でした。なんてヒドイこと、と思っていましたがそれは身近にも起こりました。伊丹教会の事務室前には花壇があり、そのころはアガパンサスを植えられていました。青紫のアガパンサスは落ち着きと清純さを感じさせる花でした。それが、一夜にしてすべて荒らされてしまいました。毎日見ている花への愛着が失われこと、あの閑静な梅の木地区で起こったという驚き、犯人への怒りで疲れました。数日は犯人探しや再犯防止のことで色々と頭をめぐらしていましたが、そのような中で美しい花を美しいと思えない心ってどんな状態だろうかとも考えました。もしかしたら、この花のように深く傷ついている人なのかもしれないと思い、そんな孤独な人が来れる教会であってほしいと礼拝で話したことがありました。

私が聖書で出会ったイエス様は「正しいことよりも、やさしいこと」を選ぶ人です。正しさで言えば犯人には罰が与えられるべきですが、罰を与えるのは神様がなさることです。人間は赦すことを学ぶ必要があります。イエス様はどんな人をも「深く憐れまれた」お方でした。ギリシャ語の「憐れむ」は「内臓」を意味する＜スプランクノン＞が由来です。古代人は、心や感情と内蔵はつながっていると感じていたようです。私たちも、緊張するとお腹が痛くなったり、悩みすぎると頭が痛くなったりします。そういうわけで、「内臓」は、「愛、あわれみ、同情」などの意味に変わっていきました。聖書学者の中には「腸（はらわた）がちぎれる想いにかられた」と訳すこともあります。日本語の「断腸の思い」ということです。そのような痛みを感じながら、イエス様は人々を見ておられたのでした。

痛みを感じてお互いを理解すること、それが十字架の意味だと私は考えています。弟子たちは愛する者を失うという痛みを通して再度集まりました。残念ながら、一人ひとりの人生も、教会の歴史も、痛みを失くして語ることはできません。しかし、その痛みを一緒に負うことでより強い絆が生まれます。伊丹に生きる皆さんが、痛みを通して、いたわり合う関係の上に、神様の祝福があることを信じています。